

禅にふれて



大岡 哲
大岡記念財団
理事長

私の思い出の写真は2016年9月、中国河北省の臨済寺でのものである。絵本『ウォーリーをさがせ!』のようだが、中央部右寄り中段に私ども夫婦が発見できるだろうか。臨済禅の開祖、臨済禅師1150年遠諱記念の日中合同法要——300人を超す僧侶に囲まれての参加は得難い経験だった。

こうした大人数の禅僧に会うことは初めてだったが、禅寺はよく訪れている。雲水に会うと自分の所作まで引き締め心地よい。さらに禅匠の徳風にふれるとなるとなおさら、心は洗われる。龍門寺(姫路)の河野太通老大師や方広寺(浜松)の安永祖堂管長にもご指導いただいている。

禅にふれるご縁を下さったのは京都の大徳寺龍光院・小堀月浦和尚だ。お参りに伺うたびに禅院の清風に癒される。本当にありがたいと感謝している。小堀和尚と大徳寺真珠庵・山田宗正和尚を囲む「紫野文苑」という集まりがある。多士済々、俳優の神山繁さんのような方までいらして、禅味の中にも談論風発、愉快的な夕べであった。小林陽太郎さんら東京

組とは京都への行き帰りでもよくご一緒した。長い歴史を有する文苑である。

東京では、日本工業倶楽部で平林寺(新座)の松竹寛山老師をお招きして「丸の内坐禅会」を開いている。忙しく人々が行き交う夕刻の東京駅前、参加者は経済人。読経の声とは、何とも言えず対照的な取り合わせだ。老師の法話の後「お経の内容は分からないが、読経しても意味があるのか」「坐禅の折、何も考えないようにするにはどうするのか」「何も考えないと、ボーッとしているのと、どう違うのか」など多くの質問が出る。そして皆で「むう」「ムー」と無の字を唸って坐る。坐れば、頭がほんのり暖かくなって体もなんとなく気持ちよい。

コロナ禍では、こうした集まりも休会を余儀なくされている。一人大声でお経を読むか、線香を前に坐ることくらいしかない。薫風来る5月、爽やかな青空のようにコロナ禍が早く、きれいに終息することを願うばかりである。



2016年、中国河北省臨済寺